P2-019

ダウン症児をもつ保護者の障害受容と親子関係，子育てストレスについて
－保護者の手記と質問紙調査による検討－

橋本 創一[1]、枡 千晶[2]、秋山 千枝子[3]

[1]東京学芸大学　教育実践研究支援センター、
[2]東京学芸大学大学院　連合学校教育学研究科　教育方法論講座、
[3]あきやまこどもクリニック

【目的】
ダウン症児をもつ保護者自身の語り（手記）やアンケート調査を用いて，子どもが成人するまでの育児期間における障害受容の過程や親子関係，子育てストレスの変移について検討する．

【方法】
手続き（1）；1980～2014年に出版されたダウン症児をもつ保護者の手記20冊（保護者32名）を対象に，障害受容や親子関係，子育てストレスに関わる記述を抽出し，修正版グラウンデッドセオリーアプローチにより分析した．手続き（2）；93名のダウン症児をもつ保護者に親子関係や子育てストレス，周囲からのサポートなどを質問紙により調査した（対象者の子ども；1-2歳18名，3-5歳22名，小学生27名，中高校生25名）．研究協力者には研究趣旨の説明と了解を得た上で個人情報に配慮した（本研究は東京学芸大学研究倫理委員会の承認（152）を受けている）．

【結果と考察】
ダウン症児をもつ保護者の手記20冊（保護者32名）から，8つのカテゴリー（ネガティブ側面：1.告知によるショック2.育児・生活による負担感3.他児との比較による焦り4.社会適応への不安，ポジティブ側面：5.我が子の命の尊さ6.サポート7.育児に対する自信8.許容的態度）とそれを構成する22の概念が見出された．我が子の障害に対する受容的な態度である「許容的態度」は，わが子と過ごす時間が長くなるにつれて形成されていくが，促進と後退を繰り返しながら形成されることが示唆された．また，手記の経年的な記述変化から，「許容的態度」の形成を促進するものとしてポジティブ側面の他３つのカテゴリーが関与しており，一方で後退させるカテゴリーとしてネガティブ側面の「育児・生活による負担感」「他児との比較による焦り」「社会適応への不安」の3つがあった．また，質問紙による結果は，現在の育児へのストレス・不安より進路や将来への不安の方が有意に高かった．そして，手記による分析と同様に，子どもの年齢が上昇するとともに障害受容や育児ストレスは軽減される（ストレスを他者に話すことの抵抗感も減少）傾向にあり，親子関係の評価は中高校生の保護者はネガティブに判断する者が多かった．また，保護者の育児態度が厳格・支配的より放任の方が育児ストレスを感じにくい傾向が認められた．いずれも健常児の保護者と同様な知見と言える．我が子や育児に関する自由記述から，「サポートへの不満」が手記分析（手続き1）による8カテゴリーに加え9つめとして明らかになった．

P2-020

性差を考慮した幼児版社会性・行動評価尺度の開発（1）
－「あいさつ」の項目の予備調査の結果－

郷間 英世[1]、大久保 圭子[7]、田中 駿[8]、桐原 彩[8]、池田 友美[3]、井上 和久[2]、清水 里美[5]、落合 利佳[4]、武藤 葉子[6]、川越 奈津子[9]、牛山 道雄[1]、圓尾 奈津美[8]、大谷 多加志[10]

[1]京都教育大学　教育学部　発達障害学科、
[2]大和大学教育学部、
[3]摂南大学看護学部、
[4]大阪大谷大学教育学部、
[5]平安女学院大学短期大学部、
[6]奈良教育大学特別支援教育センター、
[7]赤穂支援学校、
[8]京都教育大学大学院、
[9]長浜市教育委員会、
[10]京都国際社会福祉センター

【はじめに】
発達検査はこれまで、健診・発達の精査・福祉的活用など、主に知的（認知）発達の評価が主な役割であった。しかし現在は、発達障害が注目され社会性や行動などの評価ニーズが大きくなってきている。我々はこれまでの研究から明らかにしてきた結果などを基に、性差を考慮した「幼児版社会性・行動評価尺度」の開発を2014年より5年計画で行っている。遊び玩具や絵カードを用いての子どもとのやり取りを通した個別検査で、「共同注意」「人形遊び」「じゃんけん」「なぞなぞ」「しりとり」「こころの理論」など10数項目で構成され、年齢に応じて5～10項目程度の施行、所要時間は15～20分を想定している。現在、項目の選定と評価基準の設定および予備調査を行っている。今回はその中から「あいさつ」の予備調査結果について報告する。

【方法】
対象は2～6歳の幼児、男児75人、女児80人、計155人である。方法はあらかじめ作成した「いただきます」「やめて（意地悪された場面）」など14枚の図版を見せて「どんなあいさつをしますか」「なんといったらいいですかと」と順に問い、解答を求めた。得られた結果から、まず、項目別に年齢別通過率（正答率）を求め、各項目が何歳レベルの課題にあたるかを考え、次いで性差について検討した。

【結果】
すべての項目の通過率は2歳から4歳の間で急激に上昇し、6歳ではほとんどの項目で100％に達した。年齢別の検討では、2～3歳で50％を超えた項目は「いただきます」「ただいま」「ごめんね」「かして」など5項目、3～4歳で超えた課題は「いってきます」「おじゃまします（誰かの家に行ったとき）」「がんばれ（友達の応援）」「やめて（意地悪をされて）」など8項目であった。また14項目中の通過数は、3歳6.6±3.8（平均値±標準偏差）、4歳平均11.2±2.3であり、同時期に評価したS-M社会性能力検査結果SQと3歳児で正の相関（r=0.46）を認めた。性差の検討では「いれて」の通過率が3歳男児31.5％、女児50.0％など女児で高い項目もあったが、いずれも有意差は認めなかった。

【考察】
「あいさつ」は、他者とのかかわりのなかで表出される言葉であり、本検討結果から2～4歳で獲得する発達課題と考えられた。したがって「幼児版社会性・行動評価尺度」の構成課題としては、3歳および4歳対象の項目として含めることが可能と思われた。性差については例数を増やし再検討する必要があると考えられた。

Presented by Medical*Online